

「神を仰ぎ 人に仕う」

マタイによる福音書 22 章 34～39 節

女子聖学院中学校高等学校チャプレン 前川あきほ

--

ファリサイ派の人々は、イエスがサドカイ派の人々を言い込められたと聞いて、一緒に集まった。そのうちの一人、律法の専門家が、イエスを試そうとして尋ねた。「先生、律法の中で、どの掟が最も重要でしょうか。」イエスは言われた。「『心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』これが最も重要な第一の掟である。第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しなさい。』律法全体と預言者は、この二つの掟に基づいている。

--

「神を仰ぎ 人に仕う」。私たちの学院の建学の精神です。この建学の精神は、私たちの学校の存在意義であり、全ての教育活動の源泉です。時代が変わろうと、その変化の波がいかにも激しくとも、絶対に「変わらざるもの」。「変わってしまったら別の学校になるもの」。「女子聖学院を女子聖学院たらしめるもの」。それが建学の精神「神を仰ぎ 人に仕う」です。

私は一応この学校で学んだ者ではあるのですが、その期間はたかだか中学はじめの 2 年半ほどで、高校生の美味しい部分を味わっていない、なんちゃって卒業生を自称しています。しかし、人間の理解と範疇をはるかに超えた神様のご計画は不思議なもので、昨年度からまた女子聖学院の一員として加えていただきました。ほんのわずかな在学期間中と比較するのはよろしくないかもしれませんが、昨年 1 年間職務にあたってみて感じたことは、単純ですが、教育活動における様々な変容があったことです。ICT の積極的活用、探究と呼ばれる総合の時間、日帰り・宿泊行事の目的や行き先の変更、ラーニングセンターの導入、国際プログラムの実施、男子の聖学院と協働で行うプロジェクト運営などなど。社会情勢が目まぐるしく変わっているのであれば、その中を生き抜いていかなければならない生徒たちを教育する学校も変わらなければならないのは当たり前のことかもしれません。

あらゆる組織の中でしばしば叫ばれる「改革」運動は、確かに、不都合になった古い制度や機構を新しい時代に適応するために改めることをその目的としています。しかし、例えば、16 世紀にマルティン・ルターが先頭に立って興した宗教改革運動の「改革」の意味するところは少し違いました。ルターの当初の意図は、決して、当時墮落の中にあつたカトリック教会に代わる新しい教派を設立することでは

ありませんでした。結果的に宗教改革はプロテスタント教会を生み出し、カトリック教会とは袂を分かつことになってしまったのですが、ルターの改革の本当の目的はそうではなく、「聖書そのもの」に立ち返ることでした。つまり原点回帰を訴えたのでした。

「原点に立ち返ること」。改革にはこの視点があることも忘れてはならないと思うのです。そして私たちの文脈でそれを言語化し、表現するとすれば、間違いなく「神を仰ぎ 人に仕う」という建学の精神になると思います。2023 年度、女子聖学院 118 年目のページを刻み始めるこの時、改めてこの建学の精神に思いを馳せ、それが私たちの日々の教育活動にみずみずしい生命力をもって貫き通されているかどうかを、聖書のみことばの光に照らしながら考えてみたいと願っています。

「神を仰ぎ 人に仕う」。この言葉自体は、1936 年に学院の創立 30 周年を記念して翠耀会から寄贈された女子聖学院の歌の第 3 節から採られています。

「つつましき心をもて 神を仰ぎ 温かなる思いをもて 人に仕う」

この歌詞を作詞したのは、先ほど共に歌いました讃美歌も作詞された由木康先生ですが、この言葉の原典を聖書の中に見いだすとすれば、今朝お読みしました聖書箇所になります。『心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。隣人を自分のように愛しなさい。』

創立者バーサ・クローソン先生の辞任後、戦後まで学院の基礎を懸命に築かれた第 2 代院長の平井庸吉先生はこの聖句を折あるごとに引用し、女子聖学院の基本的精神として据えていたことが伝えられています。平井先生ご自身の言葉で言うと、次のようなものです。「(神を敬うと書いて)敬神・奉仕・神を畏れ(畏れは、畏敬の念の畏)・人に仕える有為(ゆうい)の人材を養成したい」。その意志は、のちの時代にも引き継がれ、現在では、大学院から幼稚園にいたるまで、聖学院すべての学校に共通するスクールモットーとなっています。

私たちの学校においてこのスクールモットーを目にする一番の機会は、英語ではありますけれど、やはりチャペルではないかなと思います。Love God and Serve His people.
日本語でその意味を捉えるのとでは異なる印象を受けます。

「神を仰ぐ」の「仰ぐ」では、神を尊敬する思い、神を自分の生き方や考え方の手本とするニュアンスが含まれますが、“Love God”では、神が私たちから遠く離れたところにおられる存在ではなく、この私と親密な交わりをもっている、すぐ隣に座っているような近い存在であることが伝わります。

また、「人に仕う」は、“Serve His people”になっています。彼の人々、つまり、神さまの人々です。私

たちが仕える対象である「人」は、決して私たちにとって赤の他人ではなく、神さまの子どもたちであるということです。それは無論、私たちも神さまの子どもであるということに他なりません。

そして大事なのは、見逃しがちな“and”、接続詞です。「神を仰ぐ」だけで終わってもいけないし、「人に仕える」だけで終わってもいけない。もっと言えば、「人に仕える」ことを可能にしてくれるのは「神を仰ぐ」という前提あつてのことです。このことを二つのエピソードから紐解いていきたいと思います。

一つ目は、著名なカトリック修道士であり、ノーベル平和賞を受賞したマザー・テレサによる次のことばです。「ミサ(カトリックでいう礼拝)は、わたしを支えている霊的な糧です。ミサなしでは、わたしは人生の一日も、あるいは一時も過ごすことができなかつたでしょう。」マザーは、一日の仕事に出る前に必ずミサを守り、「神を仰ぐ」時間をとりました。そしてマザーは神様の愛に押し出されて、この世界で最も貧しい人々を愛し、「仕える」働きに出かけて行きました。マザーが天に召されてから四半世紀以上が経った今なお、彼女の功績が覚えられているのは、マザーが仕えに出かけて行く前に、「神を仰ぐ」ことを忘れなかつたからだと思います。

二つ目は、とあるむかしの卒業生と、平井先生の後を継いだ第3代院長、小田信人先生のやりとりです。この卒業生は、「神を仰ぎ 人に仕う」が聖書のどこに書いてあるのかを小田先生に尋ねました。小田先生のお答えは次のようなものでした。「そう、あれはあのままの言葉では聖書に書いてありませんよ。でも聖書をごらん下さい。聖書の中にはずーっと通して、父、子、みたまによって人を愛することができるかとあるでしょう。私たちは神から息を吹き入れられていることを知り、それによって愛することができるのです。神から送られてくる息を知ることが一番大切なのですよ。」と、何度も何度も「神の息」を繰り返されたそうです。

この卒業生は在学中、このことばに触れ、繰り返し耳にするうちに「人に仕う」に引き付けられ、自分も他者を愛して生きていきたいと願っていました。しかし努力してみても心の中にはモヤモヤしたものが広がり、そのうちに不満すら感じるようになっていました。そんな中、ふと電車の中で「神を仰ぎ、人に仕う」と口の中で言ってみた瞬間、あつと驚いたそうです。「神を仰ぐ」ところを抜かしていた！と。そうすると、このことばがみるみるうちに目の前に大きく広がっていった、と回想されています。そういうことばがあつて、きっとこの方は小田先生に先の質問をなされたのだと思います。

人間は誰も自分本位で、エゴイストで、利己主義的な存在ですから、「人を愛したい」、「人に仕えていきたい」と願ったところでなかなか実行することはできません。この卒業生がおっしゃる「モヤモヤしたもの」とはこのことだったのでしょう。だからこそ、「神を仰ぐ」、「Love God」が大切なのです。そしてそれは小田先生がおっしゃるように、「神から息を吹き入れられていることを知ること」です。つまり、私たちの側が最初に『心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛する』のではなく、神がまず私たちを愛してくださった。究極的にはイエス・キリストの十字架に示された愛によって愛してくださった、ということを知ることから始まります。神様が、独り子イエス様を通してお示しになつ

た私たちへの愛。その愛を私たちはまず受けて、私たちも神を仰ぐことができるし、人に仕えに行くことができるのだと思います。

神から息を吹き入れられていることを知ること。神の愛を知ること。そしてそれを受けて神を愛すること、仰ぐこと。それを私たちは「礼拝」と呼びます。この学校が 118 年間、毎朝守り続けてきたものです。私たちはこの「礼拝」において、神から息を吹き入れられ、神から愛されている存在だということを知ります。そしてそこから押し出されて、生徒に仕えに出かけていきます。私たちが心掛けていきたいと願うのは、生徒たちもまた、私たちと同じように、神を仰ぎ、人に仕える存在になるために、まず、私たちが神を仰ぎ、人に仕える存在になりたいということです。この女子聖学院の大切なスピリットを生徒が学校のあらゆる場面において感じ取り、経験できるよう、より一層、神に祈り、求めていきたいと思いません。お祈りいたします。

天の父なる神様

新年度出校日の 2 日目を礼拝から始められたことを感謝します。

この学院はあなたの名前によって建てられた学校です。

そして私たちは、「神を仰ぎ 人に仕う」というこの学校の使命を果たすために、あなたから選ばれ、召し出されて集められた者です。その使命を私たちがこの時改めて心に留めることができますように。これから持たれます諸会議において、あなたのみ心が実現しますように。2023 年度のあゆみの先頭にあなたが立ってくださって、私たちにゆくべき道をお示してください。このお祈りを主イエス・キリストのみ名によってみ前にお捧げいたします。アーメン。

2023 年 4 月 5 日 新年度教職員研修会礼拝 奨励